

2013年4月25日／浪宏友ビジネス縁起観塾

自分たちの努力で

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「従地涌出品」

1. 従地涌出品のあらすじ

- (1) 他方の菩薩の誓願
- (2) 地涌の菩薩の出現
- (3) 弥勒菩薩の質問

2. 他方の菩薩の誓願

- (1) 他方の菩薩

見宝塔品で、十方の諸仏がお釈迦さまのもとに集まりました。このとき、それぞれの仏にはそれぞれ一人の従者がいました。みんなすぐれた菩薩でした。この菩薩たちを、他方の菩薩と言います。

- (2) 他方の菩薩の誓願

安楽行品の説法が終わりますと、他方の菩薩たちが立ち上がり「もしおゆるしくださいますならば、わたくしどももこの娑婆世界にとどまり、世尊のご入滅後もこの教えを護持し、説きひろめたいとぞんじます、いかがでしょうか」ともうしあげます。

- (3) お釈迦さまが申し出を断る

お釈迦さまは「お志はありがたいが、その必要はありません」と即座に断りました。そして「この娑婆世界には、ずっとむかしから無数の菩薩たちがおり、法華経をときひろめる役目はその人たちがやってくれるからです」とおっしゃいました。

3. 地涌の菩薩の出現

- (1) 地涌の菩薩の出現

その瞬間、大地に無数の割れ目ができ、そこから、ほとんど仏に近いような貴相をそなえた菩薩たちが、数えきれないほど湧き出してきました。

- (2) 弥勒菩薩の疑問

そのありさまを排していた、弥勒菩薩をはじめとする娑婆世界の菩薩たちは「このようなりっぱな菩薩がたは、いったいどこからこられたのか、どういう因縁の人たちなのか」という疑問を起しました。そしてそのことをお釈迦さまにおたずねしました。

(3) お釈迦さまのお答え

お釈迦さまは「この菩薩たちは、わたしが娑婆世界において仏の悟りをひらいてから教化したもので、いままで娑婆世界の下の虚空に住していたのです」とおっしゃいました。

これに加えて「この菩薩たちは、はるかなむかしからわたしが教化してきたのです」とおっしゃいました。

4. 弥勒菩薩の質問

(1) 弥勒菩薩たちの三つの疑問

弥勒菩薩たちは、いよいよわからなくなりました。それは、次のような疑問があったからです

- ① お釈迦さまが悟りをおひらきになってから、まだ四十余年しかたっていないのに、ほとんど無数ともいべきこの人たちを、しかも仏さまに近いほどのりっぱな菩薩に育て上げられたということは、どうしても腑に落ちません。
- ② 弥勒菩薩たちは、ながいあいだ仏さまのおそばにつかえていたのに、この人たちをいっぺんも見たことがありません。
- ③ お釈迦さまが「この菩薩たちは、はるかなむかしからわたしが教化してきたのです」とおっしゃいました。悟りをおひらきになってから、まだ四十余年しかたっていないお釈迦さまが、はるかなむかしからとおっしゃる意味がわかりません。

(2) 如来寿量品へ

弥勒菩薩は、自分たちの疑問をお釈迦さまに率直に申し上げて、お尋ねしました。

「世尊のおっしゃることですから、その通りなのだと思いますが、そのわけがわかりません。どうか教えていただきたい」

弥勒菩薩の質問に対する答えを、釈迦牟尼世尊は、如来寿量品でお説きになります。

5. 迹化の菩薩と本化の菩薩

(1) 迹化の菩薩

迹化の菩薩とは、迹仏に教化された菩薩たちのことをいいます。

迹仏とは、インドにお生まれになり、菩提樹下で悟りをひらかれたお釈迦さまのことです。ですから、迹化の菩薩とは、この世に生をうけた人間である菩薩なのです。（庭野日敬著『法華三部経各品のあらましと要点』p. 150）

(2) 本化の菩薩

本化の菩薩とは、本仏に教化された菩薩たちのことをいいます。本仏とは、いうまでもなく、この後の《如来寿量品》において開顕される久遠本仏のことです。その本仏に教化されたのが、本化の菩薩である地涌の菩薩であったのです。（同p. 150）

(3) 本化の菩薩へのあこがれ

本化の菩薩である地涌の菩薩が、いかにすばらしい菩薩であるかがここで口をきわめて褒めたえられております。

なぜここで、本化の菩薩のりっぱさが強調されているのかといいますと、〈本化の菩薩たる自覚〉をもつものが、いかに尊くすばらしい存在であるかを、強く印象づけるように表現したかったからです。

そして、すべての人に〈地涌の菩薩のような、すばらしい存在になりたい〉というあこがれと、願いをもってほしかったからに他なりません。(同p.150~151)

(4) 本仏と迹仏はひとつ

このあとの《如来寿量品》で明らかにされることですが、この世に生をうけたお釈迦さまご自身が、久遠本仏そのものであるわけです。(同p.151)

(5) 本化の菩薩と迹化の菩薩はひとつ

お釈迦さまがまさしく久遠本仏であることを知り、自分がその本仏の実子であることをしんそこから確信し、本仏として説かれたこの法華経を実践するならば、すでにその人は生身の人間でありながら、本化の菩薩なのであります。

それゆえ、迹化の菩薩と本化の菩薩は本来はひとつであり、けっして別のものではないのです。

(同p.151)

6. 本仏の救い

本仏はいつも天地の万物を救おう、救おうという精神をもって宇宙に遍満しておられるのです。「救う」といっても、網で魚をすくうように「救う」のではなく、人間なら人間、動物なら動物、植物なら植物、そのもの持っている本来の生命を生き生きと発現させ、すくすくと伸ばしてやろうという「救い」なのです。(庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p.35)

7. 信仰

(1) 仏教の信仰

仏教における信仰は、教えを信解し、信解したことを信託することです。

(2) 仏教には無い信仰

- ① 「無条件に信じます」という信仰は、仏教にはありません。
- ② 「偉い人の言うことだから信じます」という信仰は、仏教にはありません。
- ③ 「理解できないけれど信じます」「理解できないから信じます」という信仰は、仏教にはありません。
- ④ 「不合理ゆえに我信ず」「不条理ゆえに我信ず」という信仰は、仏教にはありません。

8. 信仰内容

(1) 迹化の菩薩の信仰内容

お釈迦さまの教えを学び、実践し、その人の能力の範囲内だけで世の人を救うはたらきをするだけならば〈迹化の菩薩〉です。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.152）

「その人の能力の範囲内だけで」とは、「本仏の救いに気付かないままに」ということです。真理を実践すれば必然的に本仏の救いをいただくのですが、そのことがまだ信解できず、自覚できていないのです。

(2) 本化の菩薩の信仰内容

「自分は久遠の本仏に教化された地涌の菩薩であり、本来本仏と一体の身である」ということをしんそこから自覚し、本仏の本願を自分の本願として、法華経の精神をもって菩薩行を行うならば、行う所作はおなじでも、りっぱな〈本化の菩薩〉であります。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.152）

本化の菩薩は、迹仏と同じように、お釈迦さまの教えを学び、実践し、世の人を救うはたらきをするのですが、このとき、本仏の救いを信解し自覚して努力しているところが、迹化の菩薩との違いです。

9. 地涌の菩薩

(1) 地涌の菩薩とは

地べたから湧き出した菩薩というのは、苦しみや悩みの多い現実の生活を経験し、その中で修業を積み、そして世俗の生活をしながら高い悟りの境地に達した人々のことをいうのです。

こうして、自ら苦しみや悩みを経験し、そこを突き抜けてきた人は、ほんとうの力をもっています。そんな人こそ、人を教化する力を具えているのです。（庭野日敬著『法華経の新しい解釈』p.294）

(2) 地涌の菩薩の教え

① 自身の努力で

どの世界でもそこに住んでいる人びと自身の努力によってその世界を平和にし、自身の手で幸福な生活を築きあげていかねばならない。

② 現実の社会で

現実社会の生活を体験し、汚れと濁りのなかであえいでいる大衆のなかに飛び込み、その苦しみや悩みにじかに触れることによって、ほんとうに人間を指導し、救済することができる。

③ 実践

教えは実践しなければなんにもならない。

10. 忍辱

妙法蓮華の教えの実践は、忍辱の修行に支えられていることに注目したいと思います。

- ・法師品には、教えを説くときは仏の衣を着なさいとあります。仏の衣とは、柔和忍辱の心です。
- ・見宝塔品には、妙法蓮華の教えを説くのは難事であるとし、六難九易が説かれます。六難九易の内容は忍辱です。
- ・提婆達多品では、釈迦牟尼世尊のお命を四度も狙った提婆達多に対して、授記を与えています。釈迦牟尼世尊の寛容の心が如実に表れています。寛容は忍辱の極致です。
- ・勸持品では、三類の強敵に対して、忍辱に徹することが説かれています。
- ・安樂行品では、安樂行の冒頭に、忍辱の地に住ることが説かれています。
- ・從地涌出品では、弥勒菩薩が、地涌の菩薩には大忍辱力があると言っています。